

2024 5

# ナイル

現代短歌ナイル

【今月の歌】

秋山義仁、荒牧建二  
松本美貴子、花野真輝

\*\*\*

ナイルキャンパス／五代目神田伯梅

\*\*\*

3月号作品批評／宮本史一(心の花)

\*\*\*

住谷眞第二歌集

特集Ⅲ／庄野主真

\*\*\*

本田じゅんESSAY

# NILE CAMPUS

299

伯梅閑話 —— 三人家族 ——

小村井敏子（五代目神田伯梅）

伯龍・千代は、講談に夢中の人生だったと思う。講談の台本を書き、とことんダメ出しする千代だから一緒になったのかと思っていたが、違うようだ。二十年近い間、客であった私敏子と一緒にあったとき、「こんな人だったのか」と言った伯龍だ。さまざまないきさつで、一緒になったあと、とことんダメ出ししてくれる千代だと知って喜んでいない。師匠と仰ぐ先輩たちは鬼籍に入り、師と仰ぐ人を失っていた伯龍なのだ。おいに喜んだのだろうと推察する。

千代夫人が亡くなったのは十二月。連絡を受けて、通夜に駆けつけた。お仕事先だった日蓮宗のお寺さんが大勢来て、立派な葬儀となった。実のところ、風邪をひいて、鼻水ジュルジュルな私だった。告別式は翌日の朝一番と聞いた。ちょうど授業のないときだったので、告別式にも出席することにした。そのあと、まさか、伯龍にゲットされ妻となるとは、想像もしていなかった。

伯龍は、毎日、三十分ぐらいの読経をする。私と一緒にあったあともその習慣は変わらず、千代夫人の戒名を唱えて供養していた。亡き妻への読経の間、次の妻がかしこまっているのはどうもわざとらしい。で、その間、布団にもぐりこむことにしていた。当時、フルタイムで働いていたから、伯龍の読経を聞くのは休日だ。身体を休めることが必要でもあったのだ。

伯龍に言ったことがある。「両手に花だねえ。亡き妻と次の妻と」と。伯龍が講談を続けることが千代夫人の喜ぶことだと思った。伯龍が機嫌よく講談を続けることが、何よりの千代夫人への供養だ。女性の肌には直接手のひらを触れることのなかった伯龍だ。どれほど、千代夫人を大切にしていたことか。だから、我が家は三人家族だと思っていた。